哲學研究　第百十八號

我が國古代の道德と儒教（四）

高橋俊乘

第五節　一般男女の相對的地位

多くの人が我が國は古代から男尊女卑、或は夫唱婦隨の風が有つたと言つて例に引くのは伊弉諾・伊弉冉二尊がオノゴロ島で天の御柱を旋廻して後に御子を生れたといふ有名な傳說である。古事記には二尊が天上の天の浮橋に立つて天の沼矛を以て下界にさし下して、かき廻して引上げられた時に滴りおつる雫が累積して島となつた。これがオノゴロ島である。この島に降つて天の御柱を見立て、八尋殿を見立て、この柱を廻つて美斗能麻具波比をしようと言ひ契つて、女神を右から廻り、男神は左から廻られたが、出會はれた時に女神が先づ男神に「あなにや（妍）し愛少男」と言はれ、男神が後れて女神に「あなにやし愛少女」と言はれた。その後に男神は「女言先き立つこと良はず」と言はれたけれども久美度に興して御子を生れたら、不具な御子が生れた。それで二神は相議つて天上へ上つて天神の命を請はれると、やはり女が先に

言つたのが原因で不具な御子が生れたのであつた。よつて更に御柱を廻り改めて、この度は男神が先づ「あなにやし愛少女」と言はれ、ついで女神が「あなにやし愛少男」と言はれ、然る後、御子を生れたのが大八洲及び諸神だと、記してある。

日本書紀の本文と「一書」の第一と第五と第十と次の本文の一書の第二とにほゞ同様な話が載つてゐる。すべて始の旋廻で女神が先づ言ひかけられ、後に男神が言ひかけられたが、婦女が男子に先だつて言を發するのは良くない故に更に廻り改め、男神が先に言ひ、女神が後に言はれたことゝなつてゐて、話の本筋は一致してゐる。ただ枝葉の點に差があるだけである。本文には始に陰神が先づ唱へ、次に陽神が唱へられたが「陽神不悅曰、吾是男子。理當先唱。如何婦人反先言乎。事既不祥。宜以改廻。」と言つて、すぐに廻り改められたとあり、古事記の如く、不具を生んだので、天上して天神の命を請うて後に廻り改められたと言ふやうに複雜になつてゐない。一書の第一は古事記を漢譯したのかと思はれるほど、酷似してゐる。先づ旋廻した後に不具を生んで、天神の命を請はれたやうに書いてある。一書の第五は書紀の本文に近い。天神に請うことなくすぐ廻り改められたと記してある。一書の第十は陰神まづ唱へ陽神の手を執つて夫婦となり、不具を生んだとあるのみで、それ以下は略して文が無い

が女神が先に言掛けられたまゝ夫婦となられたとあるのは古事記の本文に近い。次の本文の一書の第二も亦古事記に近い。

この二つの系統を比較すれば恐らく古事記の系統の傳說の方が後の發達であつて、婦人の先に言掛けることの不良さの深刻を示さんが爲に傳說の筋を複雜にし、迂餘曲折を求めたものである。もし太古に既に日本人の間に支那の思想の影響なくして夫唱婦隨の敎があつたものとすれば、さうしてそれが廣く實行されてゐたものとすれば、女神先言の害を深刻化する必要は決してあるまい。尤も古事記の系統の話の方が古くて、それを簡單化したのが書紀の本文の系統の傳說ではないかといふ反駁が起るかも知れないが、一般に古事記所載の傳說の方が、大てい書紀の傳說の方より新しいことはその道の研究家に知られてゐることである。

更に根本的に溯つて考へると、陰神の先言が不祥であり、不良であることは何故に傳說の根本になつてゐるか。もし古俗に於て夫唱婦隨であつたならばそれに反對するやうな陰神先づ唱へる傳說がどうして作られる事が出來よう。古俗では男女同權であつたか或は女尊男卑か又は女子の權力の方が强かつた。それが次第に支那思想に變化されて、從前の古俗と反對の思想が起つた。女が先に言つたり、行つた

りするのは怪しからんと考へられるやうになつた。その時に生れた傳說が陰神先言が不祥であるといふこの傳說である。書紀では男神がたゞ「それはよくないから改め廻らう」と言はれたゞけであるが、古事記では不良なことを具體化して、不具を生んだと語られてゐるのである。

もう一つ次の傳說を考へて見よう。

伊弉諾・伊弉冉二尊の御子の中で、天照大神は高天原を治め、素戔嗚尊は古事記では海原を治められることに定つてゐるが(書紀には始から根の國へ追ひやられることになつてゐる。)、素戔嗚尊は御母伊弉冉尊の崩ぜられたのを泣慕ひ、八握髯が胸まで延びる時になつても、まだ泣きこがれて、治むべき國を治められなかつたので、父神は怒つて妣國根之堅洲國へ追ひやられた。そこで尊は御姉神に別れの挨拶をしようと思つて天上へ上られたが、その上られる有樣は「山川悉々にどよみ、國土皆ゆ」れる程であつたので、天照大神は驚かれて「吾が那勢(弟)の命の上り來ます故は必ず美しき心ならじ、吾が國を奪はんと思ほすにこそ」と仰せられ、勇ましくも男子のやうに武裝をして待ち設けられた。尊は決して邪心なき旨を誓言しその證明に「各も〳〵誓ひて

御子生まな」と言はれたので、天安河を中にして誓を立て、天照大神は先づ弟尊の佩びてをられる劍を乞ひとり、これを三段に折り、これを天眞名井に滌いで、噛みくだいて吹棄てられた霧の中に三女神が生れられた。次に素戔嗚尊は姉神の美豆良や髮や腕に纏いてをられた玉を乞ひとり、天眞名井に滌いで噛みくだいて吹棄てられた霧の中に五男神が生れられた。時に大神は「この後に生れませる五柱の男子は物實吾が物に因り成りませり。故おのづから吾が御子なり。先に生れませる三柱の女子は物實汝の物によりて成りませり。故乃ち汝の子なり」と仰せられた。そこで素戔嗚尊は「我が心清明きが故に我が生めりし御子、手弱女を得つ。これによりて申さばおのづから我れ勝ちぬ」と仰せられた。

何故に女子の生れたのが勝であるか。これは女子を以て尊しとしたからでは無からうか。但し書紀の本文では男子を生めば心が清らかな證據であるとしてゐるから、尙この點で研究してみる必要がある。

かく誓約に御子を生む傳說は、古事記と書紀の本文との外にその三つの一書及びその次の本文の一書の第三にも有る。それらの一書では皆男子を生めば心が清らかな證據であると記してある。他の細かい點では色々違つてゐるが、この點では皆

一致してゐる。これら六種の傳に於て、古事記の傳說の方が比較的筋が迂餘曲折してゐるので、後のものであると思はれる。從つてこの傳說に於ては、淸き心である證明としては男子を生むとしてある方が古い形であらうと思はれるのである。かつ天照大御神の生まれた三女神は神代史上で有力な神ではないが、素戔嗚尊の生まれた五男神の第一は正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊であつて天忍穗耳尊自らは神代史上で殆ど活動して居られないが、天孫瓊々杵尊の父尊として重要な神である。この尊と外四神は「物實」が天照大神の珠であつたから、大神の御子と定つたが、出生は素戔嗚尊の力である。正哉吾勝勝速日といふ美稱は素戔嗚尊が誓に勝たれたことを示すものに違ひがないから、やはり男神を生めば勝になるといふ筋の方が本來のものであらう。

然らば古事記ではそれを何故に女子に改めたのか。惟ふに男の心が淸いとか、正しいとか女の心が淸く正しいとか、或は男の心が邪であるとか、女の心が邪であるとかいふ事はどの古典の他の部分にも見えない事であるから、當時尊ばれた性の方を生んだら勝と定めてあつたといふ筋であると見るべきである。

抑々この傳說は神代史の本筋には餘り重要な位置を占めて居ない傳說であつて

種々の點から、比較的後に作られた傳說であるらしい。生れた神々が三柱・五柱となつてゐるのも、漢土の思想の影響らしい(一)。又この五男神の中の天菩比命や天津日子根命が、多くの氏の祖先に擬せられてゐること(古事記の方が、氏の數が數倍に增加してゐる。この事から考へても古事記の傳說は書紀より後のものである)も、古昔、皇室及び皇室の御祖先の神々に何等關係なき氏が、その祖先を皇室及びその御祖先から分れたやうに言ひふらした事の多かつた點等から考へると、この傳說は比較的後に出來て、從來からあつた他の傳說を潤色する爲に組入れられたものと信じられる。しかもその組入れ方の整合してゐない事は、書紀に於ては、素戔嗚尊の勝たれ結末が記してないことである。古事記ではその點が比較的にまとまつてゐて、勝つた餘りに素戔嗚尊の氣が荒くなつて亂暴をされたとあり、その亂行から天岩窟の騷動を書起してある。書紀にも誓約して子を生む一節の次に天石窟の節が續いてあるが、古事記と違つて、何等前後の脈絡をつけてゐない。この點も古事記の方が後の傳說と思はせる一證である。

かく書紀と古事記とに就き同一の傳說を比較すると、書紀の方が原形に近いと思はれるに拘らず、書紀中では多くの他の傳說よりも比較的新しいものであるから、男

子を生めば心が清い證據だ」といふ條件も支那思想の影響だらうと考へられるのである。もし男子を尊び女子を賤しんだ事が固有の我が國の思想なら、さうしてこの思想が、大神と素戔嗚尊との誓の條件に表れたのなら、潤色を經た古事記の傳說に於て「女子を生んだから心が清明である」といふやうな變化を起す筈がない。古事記の傳說に潤色を與へた一人か或は數人かの潤色者は書紀にある「男子を生むことを心の清い條件」とする事が、餘り漢意に過ぎると意識して、女子と改めたのか、それとも無意識に改めたのか、その邊は判然させる事は今日では不可能なことであるが、かく變化をつけた事は、男子ひとり尊ばれずして、男女相等しい地位であつたか、或は女子の方が尊ばれたといふ證左であると思はれる。

男女が少くとも相等しい地位にあつたといふことは、崇神天皇紀に男には弭調、女には手末調と等しく調役を課したことでも知られる。これは眞の史實か否か決定は出來ないが、史實の明かな、ずつと後の事例をとると、大寶令では人生れて六歲になると、男子は二段の田を與へ、女子はその三分の二を與へ、園地は男女同額に與へたことは男女同等の著明な實例である。天平勝寶元年四月の宣命にも

男のみ父の名負ひて女は言はれぬ物にあれや。立雙び仕へ奉るし理なりとな

も思ほす。云々。

とあるのも男女同等の明證である。

上古の末、卽ち推古天皇から以後、奈良時代へかけて女帝が多く立たれ、この間だけを數へると女帝の方が多い。それ以前の古代史に於て、普通は歷代に數へ擧らないが、淸寧天皇の次に飯豐靑皇女が約十一月間、忍海角刺宮で國政を執られた。神功皇后は卽位されないで、攝政であらせられたけれども書紀では、應神天皇の卽位を皇后崩御の翌年にかけて、皇后を歷代中に數へてゐる。朝鮮民族は日本人に近いが、殊に日本に近い新羅歷代五十六王中に前後三代まで女王が卽位したことも、日本と同樣に、女子が男子と大差なく認められた爲であらう。殊に皇室の御先祖が女神となつてゐるのは女子を賤しんだ民族では決して有りうべからざる事である。又神代史に多く女神がをられて男神と餘り差が無い程である。古事記にある大八洲を諸冉二尊の生まれた記事中に、國名・島名の別名に女子の名が少くないのも同樣に考ふべきであらう。我が國古代に男尊女卑或は夫唱婦隨の敎の無かつた事はこれらの例證で明らかな事と思ふ。

更にもう一歩進んで考へると、奈良時代頃、男女がほゞ同等であつた時よりも、もつと古い太古では、恐らく男子よりも女子の方が尊く、女の方に權勢が多かつたのでは有るまいか。

その最も著しい例は皇祖神であり、同時に太陽神である天照大神が女性であらせられることである。皇祖から言つても、日神といふ點から言つても最も尊い神であり、神代史でも多數の神から、ほゞ天照大神に統一され、多神教から幾らか一神教に近づきつゝある傾向を示してゐる程に尊い天照大神が何故に女性なのか。我が國では熱帶の如く日光が酷烈でなく溫和であるから女性と考へられたと言ふ人もあるが、同じ溫帶の支那でも太陽と言つて男性を示してゐる。かつ太陽よりもつと女性的と考へられる月神は支那では太陰であるが我が神代史では月讀尊は男性である。一般に文法上の性別がない國語に於て、又支那風の陰陽といふ考のない我が古代に於て天照大神を光線の溫和な太陽から連想して女性と考へたとは思はれない。やはり我が古代人は人格としての天照大神が女であらせられたと考へたに違ひない。しかし女帝に皇婿を選び奉る風習のない我が國に於ては、如何にして天照大神を皇祖とし、皇室をその御後裔と信じらるであらうか。天照大神の御子はどうしてお生

まれになつたかといふ問題を明らかにしなければならない。その解決の一法として、御弟素戔嗚尊がその心の清いことを誓はれる方式として、姉神の珠を乞ひとり、嚙みくだいて御子を生れたのが天忍穗耳尊で、又その御子が天孫瓊々杵尊だと傳說されるやうになつたのである。

しかしこの解決は前記の如く、比較的後に組入れられた解決であつて、これで一應の解決はついたものゝ、又更に種々の破綻を新しく作つてゐる。その最も著しい破綻の一つは、書紀によると最初から素戔嗚尊は「勇悍以安忍、且常以哭泣爲行。故令國內人民多以夭折。復使靑山變枯」るやうな神であつたから、父母の二神は素戔嗚尊に勅して「汝甚無道。不可以君臨宇宙。固當遠適之於根國」と言つて逐はれた神である。逐はれたから御姉の天照大神に別れの挨拶をしようと思つて天上され、天上の仕方が頗る亂暴であつたから、大神は國を奪ふのかと疑はれた爲、御子を生んで誓はれ、尊は誓に勝たれたのである。一旦父母の二神から無道として追ひやられた尊が、誓に勝つて心が淸明であるといふ證明をえられたのは奇怪である。これは前後の傳說の作者が(必ずしも個人ではなく、多數の人、又は全民族としても)時を異にし、意圖を別にしてゐるから、かく矛盾が起つても奇怪ではないが、もし通じて同時に作られたものとす

れば、神に對する誓約を甚だしく冒瀆したものと言はなければならない。たとひ時を異にしても、後の作者が前の作者の傳說の中へ、後の作者の傳說を組入れる以上、整頓よく組入れるべきであるのに、かく前後にすぐ續いてゐる一連の傳說の中にかゝる矛盾のあるのは古代人が誓を破つても平氣であつたといふ一つの有力なる證明ではなからうか。この點は古事記も筋は同樣に作られてある。

かつ書紀にも古事記にもその次に天岩窟の騷があり、素戔嗚尊は責任者として罪過を負はせられる。大祓の祝詞や古事記仲哀天皇の段等にある國つ罪の中に數へてある多くの代表的重罪の最初の違犯者がこの素戔嗚尊だと傳へられてゐる。それで尊は千坐の置戸といふ多くの物貨で罪を贖ひ、それでも足りないで、髮や爪まで拔いて罪を償うて、神やらひに追拂はれる。一旦清明だと證明されたものが忽ち重い罪を負はせられ、多くの物を以て罪を贖ひ、髮や爪まで添へるほどの罪人となるのである。これも大なる矛盾撞着である。さうして、初、根の國へ追ひやられた尊は、その勅命が忘れられて、こゝで別の神やらひに追拂はれたのであつてこゝにも矛盾がある。かくて出雲へ下り、最後に根の國へ行かれたものゝ、出雲で八岐大蛇を退治たり、それから出雲の清に宮を作つて奇稻田姫と共に住んだりして、大變な道草をくつ

て居られる。大蛇退治はとにかく清の宮居は根の國へ逐はれ、天上から逐はれた者としては餘りに不謹愼である。別の傳には大蛇退治以前に新羅へ行かれたとある。

この不整合が、天照大神と素戔嗚尊との誓約生子の傳說を組入れた作者に見えない筈はない。この不整合をあへてしつゝも、一應この誓約によつて女神に御子のある事を肯はれうるやうに、この傳說を組入れた。かくしてまでも、天照大神を女性としなければならない理由は果してどこにあるのか。かゝる無理な傳說を附加してまで、尙天照大神を何故に女性としなければならないか。それはごく上古に於て一般に女子の方に權勢があつた爲では無からうか。

尤も他に有力な神々にして女性になつてをられるのは少い。伊弉冉尊がをられるが、伊弉冉尊は伊弉諾尊の御妻であるから、姑く別として、他の神の御妻でない女神中で、有力な神は天照大神の他にはまづ天鈿女命ぐらゐなものである。もし女子が尊ければ有力な神全部が女神でなければならないといふ反駁もあらうが、その辯解は困難ではない。といふのは、神代史の最重要點は皇祖の御先祖は天照大神であること、旦歷代天皇はこの天照大神の神意を奉じて日本を治め給ふことを力說することに存する。さうして神代史(その他も同樣に)の傳說が、次第々々に複雜化され改補

されたものである限り、この最重要點が最も初に出來た傳說である。他の神々のに關る說話はその後に出來たものである。よし、天照大神の右の御事蹟に關する以外の傳說にして、ずつと舊いものがあつても我が神代史成立以前には唯斷片的に存し、神代史成立の時に神代史成立の材料となり、右の最重要點を說明する資料に使はれたものに過ぎない。然らずんば最重要點より後に出來た傳說である。かつ最重要以外の傳說は最重要點を說明する資料であるから說明するのに都合のよいやうに改訂潤色される。從つて最初は女神であつた神も、後には漢意によつて改訂されて男神となつてしまつたものと見ることが出來る。天鈿女命が女神のまゝであるのは、偶然にとり殘されたのか、然らずんば、天の岩窟の前の神樂の時に於て天鈿女命が特殊な舞踊をした爲に本づくことか、とも思はれる。

神功皇后と仲哀天皇の御關係も女子の方に權勢のあつた古風俗を示すものではないかと思はれる。書紀にも古事記にも、熊襲が叛いたので、仲哀天皇が親征せられ、皇后もこれに隨はれたが、皇后に神がかゝつて西に寶の國がある。それを討てば熊襲がおのづから平定すると言はれたのに、天皇は國あるを知らず、詐を言ふ神だと思

つて託宣を信じられなかつたので、神の怒にふれて崩ぜられ、皇后は神の命に畏み從はれたので、神の冥助を得て新羅を征服せられたといふ筋である。この說話は傳說で潤色されてゐるが、その中味は史實で、かゝる思想上の問題ではないといふ人が多からうが、私は一部の學者に從つてたゞの傳說であると信じてゐる。何となれば書紀や古事記の新羅征伐の記事には、殆ど事實らしいものがない。その遠征の樣を古事記から引くと「整軍雙船、度幸之時、海原之魚、不問大小悉負御船而渡。爾順風大起、御船從浪。故其御船之波潤、押騰新羅之國、既到半國。」など、この征伐の記事が神祕的な奇怪な記事で滿たされてゐる。眞に戰爭があつたならば、若干の傳說が加るとも、尙若干の史實らしい確かな所があるべき筈であるのに、それが極めて少い。もとより好太王の碑文などによつて、日本人の勢力が韓半島の南半に及んでゐて、一時は相當優勢であつた事も確であるが、それを以てすぐ神功皇后の傳說を史實だと肯定することはできない。

殊に書紀には、素戔嗚尊が新羅に渡航された事を記し、又景行天皇の御代に任那が來貢した記事があり、垂仁天皇の御代に新羅の王子天日槍の歸化した話が載つてゐる上に、日槍の子孫の記事もある。それより後の仲哀天皇が新羅の存在を知られな

いと言ふのは大なる矛盾である。この重大な矛盾を、今日より如何に解釋すべきか。仲哀天皇以前の外國の記事を全部虚誕として、神功皇后の新羅征伐を外國との交渉の始と見るか。しかしそれでは、新羅の事を知らずしてどうして當時の日本人が何の動機で新羅を征伐するようになつたか、その點が理解出來ない。その外色々の解釋があらうが、史實として解釋する限り種々矛盾があつて上手に解きほぐせない。固よりこの前後に日本人が朝鮮に勢力を扶殖して、ずつと後まで續いた歴史がある。ことは動かせない。神功皇后の新羅征伐の傳說はこの勢力扶殖の起源を說明しようとした傳說に過ぎないと思はれる。故に史實と認むべきは、この點だけであるが、この起源を一女性の英雄に歸したのが此の新羅征伐の傳說の特色である。しかも傳說の作者はそれ以前の天皇の御代々の日韓交通に關する傳說(勿論これらも史實を含んで居ない)のあるのを全く知らないものゝやうである。これら各種の傳說にかく矛盾のあるのは作者が別で、時を異にしたものに違ひないが、その成立の先後の穿鑿は姑く後日の研究に委ねておく。傳說として見れば何故に男性の英雄を主人公とせずして、女性の英雄を成功の主人公として描いたかの問題が起る。勿論作者(必ずしも一人とは言はない)は女性を主人公としようと自覺的に企てなかつたであ

らうが、無意識的にかく拵へたとしても、何等かの心理作用が働いてゐた筈である。それは我が古俗に女子の方に權力のあつたことが、この傳說の作られた時、作者の心に働いたからでは有るまいか。

魏志に見える倭の女王卑彌呼の記事や、書紀の景行紀に九州に女酋長の名が多く見えることもこれに關連して考へらるべきことで有らう。まだこれだけでは、我が太古、女子の方に一般的に男子以上の權力が有つたと十分に證明できてゐないであらうが、最初に述べた、少くとも有史時代にはいつて、明らかに支那思想の影響の著しかつた上古の末、中古の始に於ても尙男女が或點では殆ど同等の地位を保つてゐたこと、從つてその事實がもつと上代支那の影響のない頃にもあつたらしいこと、その古俗と、その後にはいつた支那思想の葛籐を描いた神話の存すること(故にこれらの神話が普通に夫唱婦隨の敎のあつたことを示すものとするのは當らないこと)などは一般に信じうることゝ思ふ。

尙最後に我が國の先史時代に母系時代があつたか否かの研究はさう簡單に片附けられる問題では無からうと思はれる。古史の記錄たる古事記・日本書紀等は父系の社會に於て記錄されたものであるから、これら古典を表面から讀めば、勿論、謂はゆ

る神代卷の古傳說でも、人皇の代の古傳說でも、又史實と信ぜられるものでも皆父系社會の出來事になつてゐる。しかし稀には女子を祖先とすると傳へる氏があつて、母系社會の存在を暗示してゐはしないかと思はせる者がある。畏くも皇室の御祖先は天照大神であらせられる。猿女君氏の祖先が天鈿女命であり、古事記繼體天皇の段に「この天皇三尾君等が祖、名は若比賣を娶して」といふやうに、女子を祖先とする氏が少々ある。尤もこれは必ずしも母系の行はれたといふ證據にはならない。現に、明かに父系時代たる奈良時代にも、難波王の子葛城王が、その母橘三千代の姓をついで橘氏を名乘つたやうな實例もあるから、女が氏の祖先であるから、母系があつたかも知れないと推定する事は固より無理である。完。（大正十四年十二月）

註（一）この點は津田博士の神代史の研究によつた。